

令和5年度 編入学・学士入学試験問題

| | | | |
|-----|----------|-----|-----|
| 学類名 | 人間発達文化学類 | 科目名 | 小論文 |
|-----|----------|-----|-----|

問題1、問題2 の全てについて解答しなさい。

注意事項

1. 解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。
2. 解答は横書きとすること。
3. 句読点、引用符、括弧などはそれぞれ1字と数え、1マスを用いること。
4. 算用数字とアルファベットについては、それぞれ1マスに2字とすること。ただしこれらを単独で用いる場合は、1マスに1字とすること。

問題 1

資料 1 は斎藤孝著、『新しい学力』（岩波新書、2016 年）の一部です。資料 1 を読んで、筆者の主張を要約し、それに対するあなたの考えを 600 字以内で述べなさい。

この部分に記載されている文章については著作権法等の問題から公表することができませんのでご了承ください。

この部分に記載されている文章については著作権法等の問題から公表することができませんのでご了承ください。

この部分に記載されている文章については著作権法等の問題から公表することができませんのでご了承ください。

(出題者注) 出題の都合上、原文を一部変えています。

問題 2

資料 2 は左巻健男著、『学校に入り込むニセ科学』（電子書籍版平凡社新書、2019 年 ver.1.00）の一部です。著者の考えるニセ科学の特性を踏まえ、あなたがこれまでに聞きしたニセ科学と思われる事例、またはニセ科学かもしれない事例のうち、資料中で紹介されていないものを取り上げ、あなたがそれをニセ科学だと考えた理由を 600 字以内で述べなさい。

【資料 2】

はじめに

重要な人類の文化の一つであり、論理性や実証性を持っている科学。その一方で、ニセ科学も世の中にあふれている。ニセ科学（疑似科学やエセ科学とも言われる）は、「科学っぽい装いをしている」あるいは「科学のように見える」にもかかわらず、とても科学とは呼べないものを指す。

本書では、学校に侵入するニセ科学を扱っている。学校は、ある意味で社会の縮図である。社会に蔓延るニセ科学も学校と無縁ではないのだ。

私が中学校の教員になったばかりのころ、「超能力」だというスプーン曲げや、オカルト的なコックリさんの流行があったが、スプーン曲げは本物の超能力、コックリさんは科学的に解明できない不思議現象だとする教員がいた。天然物=自然で安全という認識から、合成洗剤、人工着色料などの食品添加物や農薬など人工的なものを極端に避ける教員もいた。

私が若いころは、教員は社会の中である程度の知的レベルを持っていて、平均的に本をよく読む層だった。しかし、今もそうだが、書店にはニセ科学的な内容の本が多く出回っており、それらに影響を受けた人たちがいたというわけである。

30 代半ばになると、向山洋一氏をリーダーとする「教育技術の法則化運動」（その後 TOSS=教育技術法則化運動と呼ばれるようになる）が登場してきた。たくさんの若手教員が参加したが、向山洋一氏やその参加者の教員はオカルト的なものにはまりやすく、ニセ科学を信じやすいと思うようになった。向山氏は「EM¹であらゆる環境問題や学校でのいじめ問題などが解決できる」などと主張していた。この運動参加者には、向山氏をカリスマ化して、彼の論説や本を中心に読む信奉者が多かった。この TOSS の数々の問題点も、本書では紹介している。

~~ (中略) ~~

そして今、教員の大量採用時代が続いている。採用試験の倍率が低い。教員になった人はかつてのように本を読まない人も多い。ニセ科学の本の影響は弱まったが、ネットの情報の影響力が強くなった。ネットには玉石混淆の情報が多く、簡単に情報を得られる一方、科学リテラシーが弱ければ本よりも容易にニセ科学の影響を得やすい。きちんとした本をいろいろ読んで科学リテラシーを身につけること、ニセ科学を見抜くセンスを身につけなければ、現代はかつて以上にニセ科学を信じてしまう度合いが高くなる危機的な時代である。

~~ (中略) ~~

1 EM は、土を改良する効果があるなどとして商品化された複数種の微生物の混合液だが、その実体や効果については科学的な証拠が不十分であるとして専門家から疑義が寄せられている。

2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震による地震動と津波の影響により、東京電力の福島第一原子力発電所で炉心溶融（メルトダウン）、水素爆発など、一連の放射性物質の放出をともなった原子力事故が発生した。

～（中略）～

これで原発の安全神話が崩壊した。私は、原発は科学・技術のかたまりなので、事故が起ころうともニセ科学とは言えないが、「万が一事故は起こっても、放射性物質が外に漏れるのを防ぐ5重の壁で守られているから安全だ」という安全神話（確実な証拠や裏付けがあるわけではないが、絶対に安全だと信じられている事柄）にはニセ科学性があると考えている。

回収された小・中学生向け原発副読本

事故が起こったのは、原発業界の悲願だった中学校理科での原子力の重視が、2008年告示の学習指導要領で決まったあとの時期だった。

文部科学省と経済産業省は、原子力発電に関する小学生用の「わくわく原子力ランド」と中学生用の「チャレンジ！原子力ワールド」という副読本を作成し、2010年に全国の小・中学校などに約3万部を配布していた。また、文科省関連の一般財団法人「日本原子力文化振興財団」のウェブサイトでも公開していた。

副読本には「大きな地震や津波にも耐えられる」「放射性物質が漏れないようにしっかり守られている」などの表現があり、安全神話が強く打ち出された内容だった。しかし、文科相自らが「事実と反した記載がある」などと発言して、副読本が回収されたりウェブサイトから削除されたりしていた。

～（中略）～

文部科学省と経済産業省、原発業界は、国民の原発に対する拒否感情をなくすためにさまざまな方策をとってきた。

～（中略）～

原子力教育推進の組織の一つに、NPO法人放射線教育フォーラムがある。

このフォーラムは「エネルギー・環境および放射線・原子力の正しい知識を普及」が目的で、名誉会長は有馬朗人氏（元文科相）である。

～（中略）～

このフォーラムは「学校で放射線をしっかり教えよ」という提案を行ってきた。

～（中略）～

学校を通して原子力、特に原発の推進をはかってきたものに、原子力ポスターコンクールがあった。現在、福島第一原発の事故を契機に「とりあえず中止」とされている。

～（中略）～

このようなポスターコンクールに子どもを参加させることに力を発揮してきた大きな教育団体がTOSSだった。TOSSは、原子力ポスターコンクールの協賛団体にも名を連ねていた。

TOSS ランド²にあった原発推進の指導事例

現在、TOSS ランドでは削除されていて見られないが、「放射線ホルミシス効果の授業（実施学年 小学校6年 総合）」という指導案があった。

タイトルにある、「放射線ホルミシス」という言葉は聞いたことがない人もいることだろう。これは、放射線ホメーシスともいう。

ホルミシスは「ホルモン」という言葉と同じ起源を持っていて、ギリシャ語で「刺激する」「興奮させる」という意味の「ホルモ」に由来する。放射線ホルミシスは、「少量の放射線を浴びると害があるどころか逆に体にいい」という話だ。1980年にアメリカのトーマス・D・ラッキー博士が提唱したもので、少量の放射線による刺激により生体の免疫機能が活性化されて、その結果、病気を治したり予防したりといった健康によい影響を与えるという考え方である。

少量の放射線は害どころか健康に有益だとする放射線ホルミシスは、原発の立地にとまなう住民説得の際によく使われていた。原発付近の住民にとっては耳馴染みのある言葉かもしれない。

私は、ラジウム温泉に関するインターネット上の掲示板でよくこの言葉を見かけた。

しかし、放射線ホルミシスは学問的な問題提起としては重要だろうが、現在までのところ、いくつかの動物実験でこの効果が示唆されているものの、この効果はないという結果もある。つまり、いまだ定説になるにはほど遠い状態である。だから、ICRP（国際放射線防護委員会）は、この効果に関心を示していても、その勧告に取り入れていない。

世界的な放射線防護の考え方は、「少量の放射線であっても害がある」ので、「無用な放射線に被ばくすることはできるだけ避ける」「避けることができる放射線被ばくは、被ばく量をできるだけ下げる」ということだ。

（出題者注）出題の都合上、原文を一部変えています。

² TOSS ランドは TOSS が作成し管理しているウェブサイト

令和5年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

人間発達文化学類 編入学および学士入学

人間発達文化学類のアドミッション・ポリシーをふまえて、2つの資料を与え、それぞれ600字以内で論述させることにより、受験者の理解力・思考力・表現力を総合的に判断する。

問題Ⅰでは、「新しい学力」に関する文章を読み、筆者の主張を理解したうえで、自分の考えを述べる能力をみる。

問題Ⅱでは、「学校に入り込むニセ科学」に関する文章を読み、筆者の主張を理解した上で、事例を挙げながら論理的に自分の考えを述べる能力を見る。